もりおか歴文館だより 16
Rekibunkan News Vol.
〈2024.7.1 発行〉

◆館長だより「ふたば」vol.12
◆2023年度事業報告
◆歴文館レポート　特別展「南部鉄器展 ―受け継がれる技と美―」
◆歴文館レポート　第5回もりおか歴史文化館自由研究コンクール
◆学芸員トピックス　伯爵・南部利淳の木版画　―「門」と「疲れたる人」について―
◆インフォメーション

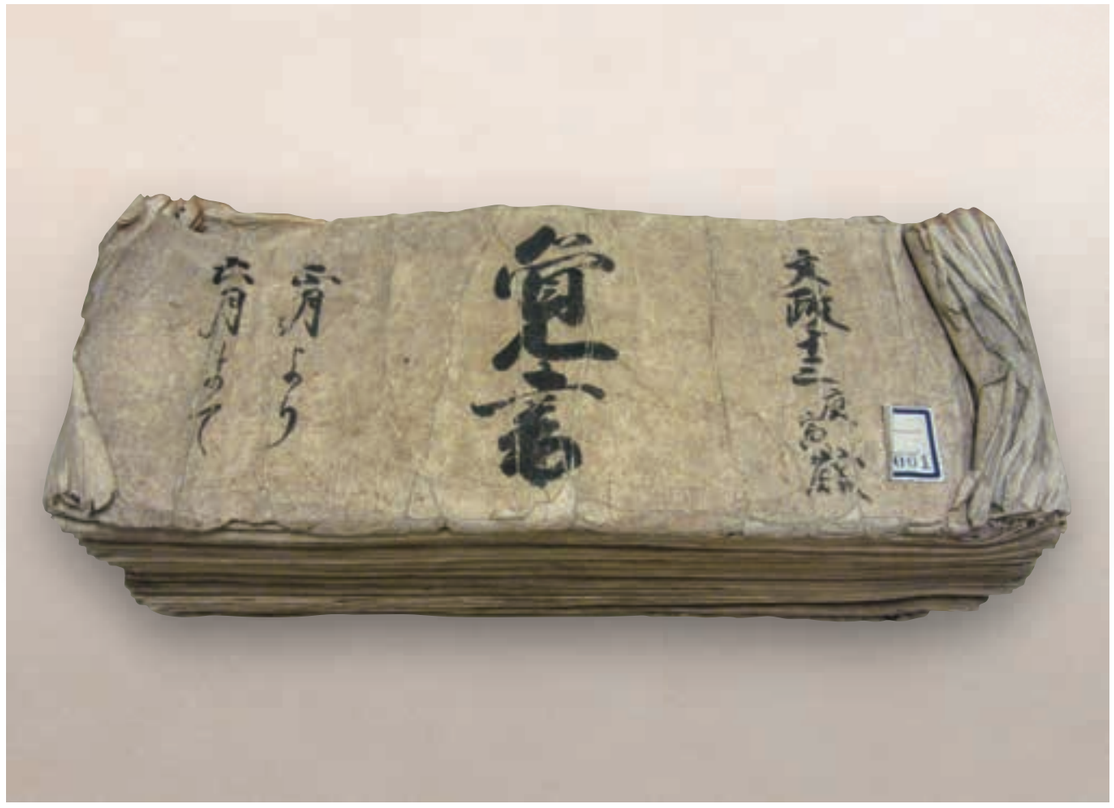
◆インフォメーション

文月の図録市

もりおか歴史文化館では、開館記念月にあたる7月に刊行から5年以上経過した図録を半額にて販売いたします。

- ●期　　間：2024年7月1日（月）～7月31日（水）
- ●対象図録：2019年度までに刊行された図録
- ●対象図録を7月以前にお買い求めのお客様にはオリジナルブックマーカーを1冊につき1つ差上げます
- ●オンラインショップでも、「文月の図録市」を開催いたしますのでご利用ください

図　録　名	価　格	割引後価格
「あの日あの時の盛岡 －馬のいた風景－」	500円	250円
「旅の枝折 －みちのく観光のみちしるべ－」	500円	250円
「盛岡の指定文化財 －未来への贈り物－」	700円	350円
「盛岡南部家の生き方･第1部 －乱世を切り抜けた南部家と盛岡のはじまり－」	1,000円	500円
「南部鉄器 －時代を超えた鐵の美－」	1,000円	500円
「盛岡南部家の生き方･第1部 －揺らぐ盛岡藩政に立ち向かう南部家－」	1,000円	500円
「ANIMALs×morioka －資料の中の動物たち－」	700円	350円
「盛岡南部家の生き方･第3部 －盛岡藩の終焉と南部家が繋ぐ未来－」	1,000円	500円
「衣装と意匠 －武家のよそおい－」	700円	350円
「殿さまのギフト －贈り物にみる盛岡藩･南部家の結びつき－」	1,500円	750円
もりおか歴史文化館収蔵資料図録1「水虎之図」	1,000円	500円



「覚書」 文政13年（1830）～明治3年（1870）　岩手県指定有形文化財

「覚書」は盛岡藩の藩庁日記で、文政13年～明治3年までの105冊（天保2～11年分は欠落）が当館に収蔵されている。「盛岡藩家老席覚書」とも呼ばれ、「盛岡藩覚書」の名称で2023年に岩手県指定有形文化財に指定された。日付・天候・月番の家老の名前とともに、日々の出来事が家老によって記録されており、105冊の内67冊は原本、38冊は原本の写しである。2022年から翻刻出版事業がはじまり、第4巻［弘化4年（1847）］までが出版されている。

ご利用案内

〈開館時間〉4月～10月　9:00～19:00（2階歴史常設展示室への入場は18:30まで）
　　11月～3月　9:00～18:00（2階歴史常設展示室への入場は17:30まで）
〈休　館　日〉毎月第3火曜日（祝・休日の場合は翌日）12月31日～1月1日
〈入　館　料〉入館は無料です。
　　2階展示室のみ有料となり、右記の入場料が必要となります。

	個人	団体（20人以上）
小・中学生	100円	80円
高　校　生	200円	160円
一　　般	300円	240円

○障がいをお持ちの方やその介護をなさる方（付添いを含めて2人まで）は、無料で入場できます。
○盛岡市在住で65歳以上の方は、入場料が免除されますので、係員に証明書等をご提示ください。
○盛岡市内の学校に就学している小・中学生の方は、入場料が免除されます。
○企画展をご覧になる場合は、別途入場料が必要となる場合があります。

〈交通の案内〉●電車をご利用の場合　○JR盛岡駅下車 徒歩20分
●バスをご利用の場合　○岩手県交通・岩手県北バス
●車をご利用の場合　○盛岡IC・盛岡南ICから車で25分
※当館の敷地内に一般車両の駐車スペースはございません。隣接する「盛岡城跡公園地下駐車場」（有料）など近隣の駐車場をご利用ください。

所在地・交通のご案内

もりおか歴史文化館
〒020-0023　盛岡市内丸1番50号
Tel:019-681-2100　Fax:019-652-5296
https://www.morireki.jp/

Morioka History and Culture Museum
もりおか歴史文化館
活性化グループ

館長だより

ふたば vol.12

2024年５月にもりおか歴史文化館館長に就任しました。よろしくお願いします。

新しい職場に入った緊張感が幾分和らぎ、「館長」と呼ばれることにも慣れ始めた５月中旬、館の内外を歩いてみました。

次から次へと入ってくる大型バスが所狭しと駐車し、ドアから元気よく降り立つ多くの修学旅行生がどんどん入館してきます。見る見るうちにミュージアムショップは買い物をする中学生で大賑わい。2階に上がれば企画展「We Love 温泉!!」が開催されています。ここでは海外の方がゆっくりと展示内容を見たあとフォトスポットで記念撮影。常設展示室では、盛岡藩の歴史や往事の人々の生活と文化の紹介、南部家ゆかりの品々の展示と盛岡城の解説など。観光客らしき方々が落ち着いた雰囲気のなかでじっくりと歴史と文化に触れています。

館の外へ足を向ければ、手入れの行き届いた花壇とそれに続く芝生広場があります。その先には日本百名城に数えられている史跡盛岡城跡が歴史の重みと風雪に耐えた美しい姿で迎えてくれます。ここでは、四季をとおしていろいろなイベントが行われ訪れる多くの国内外のお客様、市民の皆様をその時々に応じた違った顔で迎えてくれます。確かにここは「もりおか・城と城下町フィールドミュージアム」。もりおか歴史文化館をさらに魅力ある空間にしなければならないと意を新たにしたところです。

さて、先日とある方から、「盛岡城跡ですが、三ノ丸の石垣修復も順調に進んでいます。そろそろお城の復元ということにはならないのでしょうか？」のようなお話をいただきました。私はこの３月まで、盛岡市の職員として盛岡城復元に向けた調査を担当していたことから、いくつかお話をさせていただきました。お城の復元には文化庁長官の許可が必要であること、そのためには復元する建造物が規模・構造・形式等において往事のものと相当程度近くなければならないこと、復元の根拠となる史資料が必要であるが盛岡城については古写真が１枚と複数の絵図がありこの間、市民の皆様などのご協力により徐々に史資料は増えているものの決定的なものは見つかっていないこと、一方で調査を尽くしても史資料が見つからない場合は様々な角度から検証することで再現することも不可能ではないことなどをお話しました。最後に文化庁を訪れるたびに、「お城の復元に向けて重要なのは市民の機運の盛り上がりです。」と必ず言われていることを付け加えました。その方は、何とか実現したいものだとお話しされていました。

史跡盛岡城跡にお城を復元することについては様々意見があると思います。今、必要なのは、お城を復元するかどうかの二者択一の議論ではなく、史跡盛岡城跡の価値や魅力は何なのか、それらをいかに高め次世代に継承するのか、そのため史跡の保存と活用、さらには整備はどうあればいいのかについての幅広い話し合いではないかと思います。

今年は盛岡城が取り壊されて150年の節目の年です。もりおか歴史文化館では、「城の跡－残された盛岡城関連資料－」と題して８月から10月まで現存する諸資料から盛岡城の実態を探る企画展を実施します。史跡盛岡城跡の保存と活用の話合いに館としても幾ばくか貢献したいと考えています。

皆様のご来館を館員一同、お待ちしております。

2024年７月１日

もりおか歴史文化館 館長 **熊谷 俊彦**

◆2023年度事業報告

第38回企画展「南部家のたしなみ －射る・騎る・撃つ－」

【担当学芸員：小原祐子】

2023年4月29日（土）～7月10日（月）

2021年度から、江戸時代の南部家の学びに関する展示を「南部家のたしなみ」と題して行った企画展の最後として、武士の本分である弓術や馬術などの武術を取り上げました。江戸時代の南部家の人々が武芸をいつ誰に学んだのかという点に着目しながら、人柄が偲ばれるようなエピソードを交えて展示を行うように努め、南部家の人々が武芸の稽古に励んでいた様子を伝えました。展示の最後では、南部家の人々が、明治時代以降も学問などをたしなむことで自己研鑽し、社会的貢献を行っていたことを示すことで、３ヶ年の企画展の総括としました。

第39回企画展「罪と罰　犯罪記録に見る江戸時代の盛岡」

【担当学芸員：福島茜】

2023年8月11日（金）～10月31日（火）

2020年度から3回にわたって小規模展を開催して来た「罪と罰」シリーズの集大成として企画した展覧会です。現存する江戸時代の犯罪記録をひとつずつ読み解きながら、犯人のどの行動が悪と判断され、どのような罪にどのような罰が与えられたのかを、39件の事件と24の関連資料を介してご紹介しました。人々の持つ「罪と罰」の意識は、社会構造によって変化するその時代特有の価値観・倫理観によって異なります。本展では、「罪と罰」の意識の根本にある倫理観を通じ、事件当時の社会の様子やそこに生きた人々の姿を感じていただけたと思います。

第40回企画展「もりおか古文書学演習 －古文書が語る盛岡南部家の歴史－」【担当学芸員：熊谷博史】

2023年12月9日（土）～2024年2月19日（月）

当館に収蔵される古文書資料について、「古文書学」的な視点、すなわちその古文書に書かれている内容（歴史事象）とは別に抽出できる、古文書に内包されるさまざまな情報（使う紙、文字の書き方、署名の仕方、日付・宛名の書き方など）に注目することで、改めてその歴史的意義や魅力に触れてもらう展示を開催しました。より古文書に親しんでいただくため、今回は観覧者自身が考えながら古文書と対峙することで、古文書のおもしろさに気付いてもらうことを目指し、ワークシート（演習問題）を解きながら古文書を読み解く形式としました。

◆歴文館レポート　特別展「南部鉄器展 ー受け継がれる技と美ー」

【担当学芸員：小西治子】

2024年3月3日（日）～3月23日（土）

2020年度、2022年度、そして2023年度の今回で特別展「南部鉄器展」は3回目の開催を迎えました。今回は展示室の一角に「盛岡・南部鉄器のあゆみ」のコーナーを設け、当館収蔵資料から江戸時代の鋳物師たちに関する資料、大正～昭和時代初期頃の南部鉄器や制作道具等を示しました。共催者である南部鉄器協同組合から金澤専治 鶴齋（2代目、1911～1999）の図案帳を、鈴木盛久工房から13代鈴木盛久 繁吉（1896～1976）、14代鈴木盛久 貫爾（1919～1982）の茶の湯釜もお借りして展示することができ、より南部鉄器の歴史の深さを伝えることができました。そして現役の職人20名による作品【計31点（48種）】を見ていただくことで、江戸時代から現在まで受け継がれてきたその技と美を堪能していただけかと思います。

また、初の試みとして南部鉄器職人よるギャラリートーク（2024年3月17日開催）、観覧者作品投票を実施。ギャラリートークは畠山拓巳さん（薫山工房）と阿部亘さん（岩鋳）に出演していただき、当日は50名を超える参加者が集まりました。自身が作った作品のこだわりや、制作する際に苦労した点など、実際に制作した本人だからこそ聞くことができるお話しの数々に、皆様興味津々のご様子でした。ギャラリートーク内、終了後も質問が多く寄せられ、参加者の皆様のみならず、ご出演されたお2人からも非常に充実した時間を過ごすことができたとのお声をいただきました。

観覧者作品投票は、お気に入りの作品を最大3点まで選んで投票していただき、結果1,646票もの票が集まりました。どれも職人の皆様のこだわりが詰まった作品であり、票はかなり分散しました。次ページに観覧者作品投票トップ3を掲載しておりますのでご覧ください。

作品を出品してくださった職人の皆様、多方面に渡りご協力いただいた南部鉄器協同組合様、そしてご来場・投票に参加してくださった皆様にこの場を借りて改めて御礼を申し上げます。本展へのご意見・ご感想を参考にさせていただき、2024年度もよりパワーアップした特別展「南部鉄器展」を開催できるよう尽力してまいります。

ギャラリートークの様子

展示室全体の情景

◆第1位「布団型鉄瓶シマエナガ」120票

制作：畠山拓巳（薫山工房）

〈受賞コメント〉

30点を超える作品の中から投票結果1位を頂き光栄に思います。若手からベテランまで優れた南部鉄器作品が多く並ぶ中で選ばれたことは自信にもなりますし、成長を感じることができました。投票してくださった皆様ありがとうございます。

この作品はクラシックな布団型を意識して制作しました。蓋の摘みは冬のふっくらとしたシマエナガをイメージしています。

伝統的な形にプラスして摘みの意匠に遊び心を加えることで可愛らしさを表現しています。今後も基本を大切にして、使う人が喜んでくれるような南部鉄器を制作していきたいと思います。よろしくお願いします。

◆第2位「鉄瓶 唐草椿」91票

制作：宮田康矢（タヤマスタジオ）

＊特別展・作品紹介コメントより
津波被害を受けた街に椿が咲き誇る様子を表現しました。

◆第3位「糸目文末広釜」87票

制作：十五代鈴木盛久 志衣子（鈴木盛久工房）

＊特別展・作品紹介コメントより
櫛目文・糸目文など縦筋の文様の作品を作ってきましたが、この茶の湯釜は無地の部分と糸目の部分の変化を表現してみたいと制作したものです。

◆同第3位「尻張鉄瓶蔓豆」87票

制作：髙橋大益（鉄瓶工房髙橋）

＊特別展・作品紹介コメントより
鉉の根元から蔓がひょろり。
尻が大きいので安定感があります。

◆歴文館レポート「もりおか歴史文化館自由研究コンクール　第５回報告及び第６回開催のお知らせ」

【担当学芸員：太田悌子】

もりおか歴史文化館自由研究コンクール、通称「モリガク」は2018年から活動を開始した歴文館サポーターズふたば（2019年度まで活動）の事業企画部に所属していた、盛岡の高校生の提案から始まりました。

江戸時代に盛岡藩の城下町として発展し、魅力的な歴史と文化が息づいているここ盛岡ですが、そのことを知っている、または知ろうとする友人・大人が少ないのはどうしてだろうか？どうすれば幅広い世代に興味・関心を持ってもらえるか、盛岡に愛着をもってもらえるか考えた結果、小学校で夏休み・冬休みに課題としてだされる自由研究がそのきっかけになるのでは…ということで、企画は実行に移されました。

2018年度に第１回、2019年度に第２回モリガクを開催し、盛岡の歴史や文化に対する探求心、地元への愛着が感じられる数々の力作が集まりました。2020年度のコロナ禍の中止をはさみ、2023年は４年ぶりに作品展と表彰式を開催いたしました。遅くなりましたが、ご応募いただいた８名の小学生の皆様、力作のご応募ありがとうございました。第５回モリガクでは、はじめて岩手県外からのご応募もありました。

第６回モリガクも、小学生の皆様の研究・作品のご応募をお待ちしております。盛岡の魅力を多くの人に知ってもらいましょう！盛岡市外・岩手県外からのご応募も大歓迎です。学校での展示の後に、ぜひモリガクへご応募ください！

もりおか歴史文化館では、夏休みに自由研究の進め方を分かりやすく解説する「How to 自由研究パネル展」を開催いたします。皆様の盛岡の歴史や文化に対する相談や質問は、いつでも受け付けています。お気軽にお問い合わせください。

〈2023年度受賞作品〉※学校名、学年は受賞時

【最優秀賞】「ブルーベリーは　イーハトーブの輝く星だった！」　さいたま市立沼影小学校　５年生　山田峻久さん
【優秀賞】「Mei'sニューヨークタイムズ」　桜城小学校　２年生　坂本芽依さん
「わたしたちの街　盛岡」　津志田小学校　３年生　古川麗奈さん
【館長賞】「古代文字と折り紙あそび」　中野小学校　１年生　長洞実良さん

会場の情景

第6回もりおか歴史文化館自由研究コンクール
応募期間：9月1日（日）～9月30日（月）
作品展：11月2日（土）～11月18日（月）
※詳細については、応募期間が近づきましたら当館公式ホームページなどで、情報を公開いたします。

How to 自由研究パネル展
日時：7月17日（水）～8月19日（月）
場所：1階　祭り企画展示室

◆学芸員トピックス「伯爵・南部利淳の木版画　―「門」と「疲れたる人」について―」

【学芸員　福島茜】

2023年に開催したテーマ展「シロクロトシアツ　―伯爵・南部利淳の木版画―」（以下、「テーマ展」）は、盛岡南部家43代当主・南部利淳による木版画を公開し、利淳の木版画制作の様子を明らかにしようとした試みでした。しかし残念ながら、制作開始時期、指導者の有無、モチーフなど、多数の疑問が未解決のままの開催となってしまいました。そこで今回は、新聞記事「南部伯夫妻の芸術」（『岩手日報』1921年10月19日）を参照しながら、2点の版画のモチーフや制作時期について検証してみたいと思います。

この記事は、1921年10月14日から3日間開催された聊娯会展第3回展に利淳・嚴子夫妻が出品した作品と制作背景について、利淳へインタビューを行ったものです。聊娯会展は、洋画家の黒田清輝らとともに利淳が中心となって開催した華族による美術展です。利淳はその第3回展に3点の彫刻と、「疲れたる人」「門」と題した2点の版画を出品しました。

「門」は、利淳の遺作集『おもかげ』に唯一題名を付して掲載された作品です（図1）。利淳はこの作品について記事中で「一昨年京都地方を旅行した時の印象を出した」と語っており、「門」は1919年から1921年10月までに制作され、モチーフは「京都地方」で利淳が見た風景であることわかります。さらに記事中の利淳が、もう1点の「疲れたる人」について「労働者のやうに見えますが別にモデルを置いて致したのではなく恁ういふ事もあらうと思つて想像したままを現しました」と語っている点に注目しましょう。「疲れたる人」は写真などが残されていませんが、利淳のこの言葉に当てはまる作品が、1点現存しています。テーマ展で「無題（労働者）」として展示した作品です（図2）。「無題」は壁にもたれて座る労働者風の男性を描いた作品です。情報が少なく断定は難しいものの、現時点ではこの作品が聊娯会展に出品された「疲れたる人」であると考えてよいでしょう。

利淳は制作歴についても「彫刻は（中略）最早八年程親しんでをり」「版画は彫刻と同じやうに数年前より折に触れて弄んでゐますが是れは先生も何もない我流」と語っています。これが事実なら、彼の版画制作は1910年代前半から独学で行われていたわけです。テーマ展の中で私は「利淳の作品は出来過ぎている。指南役がいたはずだ」と指摘しましたが、指南役についての指摘は撤回しなければなりません。しかし、本当に「我流」であるならやはり、利淳の版画は「出来過ぎている」と思います。どのような手順で、どんな道具で、どれくらいの作業量でこのような優作を生み出したのか、興味が尽きません。

参考文献：佐々木一成「堀江尚志の生涯と芸術」『岩手県立博物館研究報告』第3号 1985 岩手県立博物館

図1.「門」

図2.「無題（労働者）」または「疲れたる人」